

新型コロナウイルスへの対応から検証する 今、そして今後の 保育の本質を思考する

「新しい生活様式」が提案され、家庭や職場の日常生活が変化するとともに、保育現場も変わりました。Webなどを積極的に活用する「リモート保育」など、これまでにない新たな試みが行われるなかで、「保育の本質」を捉え直すとても良い機会になったという声が増えるようになりました。今回、埼玉県・こどもむら（認定こども園こどもむら 栗橋さくら幼稚園、認定こども園こどもむら さくらのもり、こどもむら保育園さくらいろ）の保育者たちの取り組みを振り返りながら、どのようなことが見えてきたのか、検証していきます。

監修：増田まゆみ
協力：こどもむら
（埼玉県久喜市）
写真：こどもむら
（P10～P17・21の掲載）
渡辺 博（P18・19）

Contents

- 事例報告 — P.11 認定こども園こどもむら 栗橋さくら幼稚園
さくらの塔（3・4・5歳児）/ つぼみの塔（0・1・2歳児）
P.14 認定こども園こどもむら さくらのもり
P.16 こどもむら保育園さくらいろ
- 対談 — P.18 増田まゆみ（福岡ケアアンドエデュケーション研究所 所長）
柿沼平太郎（学校法人林沼学園 こどもむら 理事長・学園長）
- まとめ — P.21 保育の本質を思考し、今後に活かす
増田まゆみ

事例報告

2020年4月の登園自粛以降、園の現場において、どのような動きがあったのでしょうか。施設ごとに、その時の対応やそこでの気づきをお聞かせいただきました。

トピックス

保育者が主体的に 取り組んだDVD作成

登園自粛となった4月中旬、家庭の子どもたちに対して何かできることはないかと職員間で検討し、DVDを作成することになりました。

まず、担任が中心となって話し合い、「見て楽しめるだけでなく、園と家庭がつながるものを作りたい」ということから、学年クラス・年齢を超え、アイデアを出し合いました。これは、指導していただいた講師と共に、継続して、一人ひとりの思いを大事にしながら、その思いを語り合った園内研修を重ねてきた成果だと思っています。

様々な反応 子どもと保育者の育ち

例えば、4歳児には、映像で、食事の当番はエプロンやバンダナを着けることを具体的に伝えるところ、登園が再開してから、すんなり当番の準備ができる状態になっていました。どの年齢も、それぞれ意欲的に取り組む姿が見られ、成果があったことに喜びを感じています。

子どもたちのためにという目標に向かい、期待感とともに、どうしたらいいのかという不安感ももちつつ作業を進めるなかで、保育者同士の距離が一気に近づき、チーム力が発揮されていく様子がとても印象的でした。保育において結果よりもプロセスが大

事なのは、保育者にとっても同様だと感じました。これまで、ほかの年齢の保育者同士が保育を語り合う時間を多くは取れなかったのですが、保育者から、「こういう機会がこれからはほしい」という声が出てきました。

また、保育者の個性がとてもよく表われました。歌が得意、素語りが得意など、それぞれの新たな一面を発見することができました。DVDを見た保護者の方も感じていたようです。保護者の方は、わが子の年齢以外の保育者についてかわりが少なくながちですが、このDVDがきっかけになって、「保護者から話しかけてもらった」「会話が生まりました。保育者と保護

認定こども園こどもむら 栗橋さくら幼稚園（定員273人）

情報発信と園生活のもつ 意義を実感



お話をうかがった人
さくらの塔
3・4・5歳児（定員30人）
副園長 小澤裕美先生



お話をうかがった人
つぼみの塔
0・1・2歳児（定員30人）
園長 渡邊美早貴先生



1

事例

者との距離も縮まったことを実感しました。

そして、自粛期間中、子どもたちにこんな経験をしてほしいという思いから、保育者が、園内の保育環境の見直しに取り組みました。例えば、ままごとコーナーづくりです。以前ウサギを飼っていた小屋がありました。そこをこの機会に、ままごとコーナーにしようということになったのです。DIYが得意な保育者が中心となって、法人内の別の園の保育者にも応援に来てもらいながら改造しました。保育者同士、それぞれの得意なことや発揮された個性を通して、新たな関係性が築かれたことで、刺激し合えたようでした。

園からの情報発信の意味

自粛期間中、家庭との連絡はメールが中心になりました。行政から届いた要請の文書について、

て、また、園の対応や今後のスケジュールなどを定期的に配信していきました。その後には、

「園からメールで情報が来たことがありがたかった」という回答がいくつもありました。どれもが手元のスマートフォンなどで簡単に情報を得ることができ、保護者の安心材料になるという点に改めて気付きました。また、「園からの電話連絡がもっとほしかった」という声もありました。今回、対応できなかった点です。少しでも声を聞けると安心感が得られます。今後、直接話したり、悩み相談ができたりする支援体制などを含め、園からの情報発信を保護者サポートの1つとして意識して行っていければと感じました。

行事の見直しの視点

習慣も身につけています。そういう園生活のもつ役割や、保育の重要性を改めて感じる機会にもなりました。

つばみの塔

DVD配布の成果、楽しい遊び・園に行きたいな

つばみの塔の定員は33人（3歳未満児）です。登園自粛期間中は毎日10人程が登園していました。期間中、DVDを2回配布しました。1回目は、まず、兄で楽しむことをコンセプトにして、年齢ごとに、手遊びの紹介や紙皿シアター等を中心に収録



(上)園特製の手作りおもちゃキット(塔)。 (下)DVD。保育者のアイデア満載の内容になった。

しました。2回目は、保育室やおもちゃの紹介をしながら、子どもが「園に行きたいな」と思うような内容としました。

DVDで保育室を紹介した効果なのか、慣らし保育期間中、ずっと泣いてばかりだった子どもが、登園再開後、すんなりと保育室に入り、とても落ち着いて過ごす姿も見られました。

また、DVDの内容に合わせて、園特製の手作りおもちゃキットを作成しました。保護者の方から、家庭での遊びに困っているという声があり、親子で作って楽しめるようにと考えたからです。今後、入園や進級などを迎える子どもたちが、スムーズに新しい生活を開始するための方法として使えるのではないかと考えています。

保育を客観的に見る機会に

DVD作成は初めての試みで、



大変な状況ではありますが、保護者からは「行事は、少しでもやってもらいたい」という意見がありました。そこで、全く行わないのではなく、これまでとは形を変えながら開催する方法を検討し始めました。例えば、夏祭りなら、毎年、地域の方々を大勢招待していましたが、今回は、園児と保護者の方だけの参加とし、年齢ごとに時間を分けて行うようにしました。これまでも行事の見直しを行ってき

ましたが、今回の経験から、「今までこうだったから」ではなく柔軟に考え工夫していくことが大事だと感じました。

園生活の役割を再認識

保護者アンケートの結果には、「子どもの生活が乱れてしまった」「運動不足になった」といった意見が多くありました。日常の園生活では、遊びを通じた様々な体験から、豊かな人間関係が築かれていき、あわせて、生活

最初戸惑いがありました。子どもたちと直接会えるわけではなく、画面を通してのつながりになってしまっているので、伝わりにくい部分が出てくることも想像されました。ただ、どのように表現すればわかりやすいか、楽しそうに見えるのかなど、みんなで見え出し合い共有しながら進められたことが、チーム力アップにつながっていったと思います。また、保育者一人ひとりが自分の保育の進め方ややり方を客観的に見る良い機会にもなりました。

子どもの育ちを見ることの大切さ

2か月の登園自粛期間の後の保護者アンケートでは、さくらの塔にもあったような、生活リズムの乱れや、体力が有り余って困った、また、体力が落ちてしまったといったような声が寄

せられました。あわせて、食についての意見や悩みも多く、「栄養のバランスが取れているのか気になった」「好き嫌いが激しくなってしまう、どうしていいかわからなかった」などの感想もありました。生活リズム、体力、食の問題などから、子どもにとっての園生活の意味と、家庭での生活面へのサポートの重要性を感じました。

また、登園再開後に向け、保育環境の準備や保育の計画を考える際、特に低年齢の子どもは成長が著しいので、2か月でどのくらい成長しているのかを想像するのに苦労しました。保育者同士で話し合い、検討することで、保育を深く考える機会になったのと同時に、子どもの育ちを実際に見て、こうやってほしいと考えることこそが保育の基本だと、再認識することにもつながりました。



砂遊びや水遊び……。園生活の中で子どもたちは、五感を思いっぱい働かせて遊び

像できました。
しかし、子ども、保護者、園の職員それぞれに感染リスクがあり、「どうせ登園してください」とは簡単には言えません。安全

2

認定こども園こどもむら さくらのもり (定員90人)

保護者に寄り添うとは どういうことか？



お話をうかがった人
土曜保育教諭 深谷恵子先生



ブログで発信

それぞれの家庭向けに、それでも活用していたブログを使って、各クラスから情報発信をしました。月2回の更新から、緊急事態宣言の際は、週2回とかなり回数を増やして、更新しました。

内容は、登園できない子どもの気持ちに配慮し、「園は楽しそう」とだけ受け取られることがないように配慮するとともに、「早く園に行きたいな」と思えるようにしながら、また、家庭保育に少しでも役立つ内容を保育者みんまで考えました。それぞれ子どもの育ちに合わせながら、基本的には、それまで園で行ったことや、家庭にあるものを使ってできる遊び等を提案しました。

特に、0・2歳児クラスには、栄養士から育ちに合った離乳食の作り方や、「りんご1個で医者

いらす」などといった食事に關するママ知識などをベテラン保育者が楽しく紹介しました。

当園はほとんどが2号、3号の子どもで、1号の子どもは10名と少数です。緊急事態宣言のなか、全園児90人のうち、40人程度が登園していました。

家庭に手紙や製作キットを

登園できない子どもたちへの対応としては、3・5歳児クラスは、担任が家庭を訪問し、おたよりや園での製作を予定していた製作キットを届け、ほんの少しですが、玄関先で子どもと話すなど、ふれ合いを大切にしました。

0・2歳児クラスは、おたよりを郵送しました。また、長く

を守りながら、保護者の方の不安やイライラを少しでも和らげるためにはどうしたらよいかと考えた結果、5月のゴールデンウィーク明けに、当園に併設されている子育て支援センターで「子育て電話相談」を開始することにしました。相談したいことがあればお電話くださいと在園児の保護者に伝え、また、支援センターに登録している保護者の方にはおたよりを郵送しました。

例えば、妊娠されているお母さんから、出産予定日が近く、不安を募らせているところに、家から出られずもやもやした思いから2歳の子の育児に手を焼いて、どうしてよいのかわからないといった相談がありました。お話をすることで次第に落ち着かれ、具体的な対応をアドバイスすると安心したようでした。また、普段からお子さんの発

達を気にかけて、育児不安気味であったお母さんからは、何度か電話がありました。その状況から、閉鎖期間中ではあったのですが来ていただき、保育者がお母さんのお話をうかがっている間、お子さんは庭で遊び、母子ともに気持ちを受け止めるように配慮しました。電話相談の多くは、不安な気持ちを話したい、聴いてほしいと思えるようなものでした。

保育者自身の行動把握を

園内研修では、自己管理の大切さを共通理解できるようにもしました。責任ある保育を担う職員から感染者が出るのを防ぐための対応が求められます。職員が感染した場合、感染経路が明確であることが大切です。そこで、職員に対して、自身の行動把握・園長への的確な報告の必要性を園内研修で確認した結



園のブログ画面。緊急事態宣言の際は、月2回から週2回に更新頻度を上げた。家庭保育に少しでも役立つ内容を発信するよう努めた

お休みしていた家庭には担任が電話連絡し、子どもの様子を聞いたり、困っていることに対してはアドバイスしました。自園期間中、登園できなくても電話で話すことで、つながりを感じることができました。

子育て電話相談

仕事をしている保護者の方は、長時間お子さんを園に預けています。そのため、緊急事態宣言が出ていた時期、子どもと一日一緒に過ごすようになった状況では、不安などからストレスを強く感じる方がいるだろうと思

果、この意識を全員がもって行動するようになりました。

保護者に寄り添うとは どういうことか？

この時期、保護者とのやりとりをするなかで、園長や保育者の言い方や伝え方ひとつで保護者の反応がかなり変わることを経験しました。普段は難しいのですが、登園児数が少ないことから保護者と話し合う時間をもてたことで、暮らしぶりや勤め先のことなど、保護者のことをより深く理解することができました。また、保護者一人ひとりがいろいろな価値観をもっていろいろなことを強く認識しました。

園側から発信する場合、それぞれの背景の違いを受け止めながら行っていくことが大事だと感じました。今後、より一層、保護者に寄り添う気持ちが必要だと考えています。

事例 3

保育とは何かを 考える機会に



お話をうかがった人
主任 伊東実希先生



**子ども・保育者・保護者を
つなぐために**

当園は、0・1・2歳児19人が在園する小規模保育園です。登園自粛期間中は、多くの方に協力いただき少人数での保育となりました。登園自粛期間が4月中旬頃からであったこともあり、まだ園に慣れないうちに休みに入ってしまった園児が多かったのですが、園のことを忘れないでほしいというメッセージを込め、まずDVDを作りました。園児の名前を保育者が呼びかけるコーナーや、園内の施設を紹介するコーナー、加えて、静かでゆったりとした歌や手遊び、体操や親子で楽しめるヨガなども収録しました。こうして出来上がったDVDは、各家庭の様子をうかがう意味も含めて、保育者が直接、お届けしました。

ている間に仕事や、家事ができるので、とても助かります。おうちでも先生に助けられるわ」と温かい言葉をいただきました。離れていても、具体的に

に映像で伝えることで、子どもが楽しみ、保護者もその楽しさを共有できるだろうと、期待感が膨らみました。

また、お母さんたちも子どもと一緒に落ち着いて楽しく過ごすことにつながるのではという思いから、手作りの絵本を作成しました。

他者の思いを受けとめ合い、豊かな対話へ

自粛期間中、園に子どもがいないことから時間的に余裕があり、保育者同士でよく話をするようになりました。これまでの



保育者の手作り絵本。子どもが手に取って読べ、家でゆったりかかわれるきっかけになればと、1人に1冊、手渡した

法人全体の園内研修でも、「保育環境を見直してみる」「エピソード記録により保育を思考する」などの課題を通じて互いに意見を出し合う機会が多かったので、自然と「環境を通して行う保育、子どもの主体性の尊重」といった話題が深まってきました。

ある保育者の「今こういうことを悩んでいるんだよね」の一言に、「じゃあ、こういうのはどう？」と声がかかるようになりました。会議の数は増えていないのですが、多くの人の意見を聞けることで、いろいろな解決策を考えることができるようになった。

ります。一人ひとりのかわりかとても濃くなり、仕事以外のことも話せるようになりました。4月には人事異動があり、話ができなままにいる保育者もいたのですが、この時期、たくさんさんの意見交換ができ、保育観や保育の方法など、多くのことを学ぶ機会になりました。

**「季節感と音楽」を
保育環境に活かす**

保育者同士での意見交換で、保育には「季節感と音楽」を活かした環境が大切だということに改めて気付くことができました。



園庭や散歩に行った先など、どこでも好奇心の赴くまま、元気に遊ぶ子どもたち

た。特に0・1・2歳の時期は、様々な首、保育者のやさしい歌声など音楽的な環境の中で、感じ、関心をもち、自ら活動しながら、経験を重ねていきます。季節に合った歌を楽しむことの大事さにも気付かされました。

そのため、DVDに加えて、園のブログでも、自然をテーマにしたながら、家庭でも楽しめる製作物や保育のアイデアなどを紹介するようになりました。

今(取材のあった8月)、園では、2歳児たちが野菜を育てています。そこで、今後、季節感を意識しながら保護者に園の生活の様子を伝えるために、野菜が毎日どれくらい大きくなっているのか子どもたちが観察する様子、子どもと一緒に家庭で楽しめる

食のヒントなどをあわせて伝えたいと考えています。

4月に配布したDVDには、園でよく歌う歌を収録しました。すると、以前「この子、いっぱい歌を歌ってくれるんですけど、何の歌かわからないんですよね」と言っていた1歳児のお母さんがそのDVDを見て、「この歌なんです。やっとながりました」と話してくれました。動画が保護者に保育内容を理解してもらうきっかけにもなりました。

これまでの伝え方では、保護者に、保育の方法やその背景にある思いまでは伝わっていないかのように感じます。もっと伝えなければいけないことがあったのではないかと、伝え方を工夫する必要にも気付かされました。

**少人数保育を実現するために
「クラスの枠を超えて」**

0・1・2歳児の保育ではソーシャルディスタンスをとることがなかなか難しい状態です。そこで、どういう工夫ができるか職員間で検討するなかで、スペースを区切り、少人数での保育を充実させていこうということになりました。水遊びも、プールのほかに、泡遊び、色水遊び、水遊びなどのコーナーを設け、少人数でそれぞれ楽しんでいきます。これまでもコーナー保育には取り組んでいましたが、アイデアの引き出しを増やせるように、話し合いを進めているところで

す。会話を交わすことで心の距離が近くなり、クラスの枠を超えて考えることによってチーム力が生まれました。チーム力が高まり、保育者相互の絆が深まることで、目指す「子ども主体の、すてきな保育園」に少しずつ近づける可能性を感じています。

増田先生（以下、増田）…新型コロナウィルスは保育に大きな影響を与えました。緊急事態宣言で登園する子どもの数が少なくなったことで、園内で保育を語る時間が増えたそうですね。柿沼先生は、保育者の語りをどのように感じましたか？

柿沼先生（以下、柿沼）…確かに大変な状況でしたが、保育者の成長がこんなにも見られた時期はなく、とても心強く感じました。子どもむらは、系列園が5園あるのですが、近くにあっても各園の成り立ちが違います。それぞれの園ごとに、何ができるかを考えて行動しました。理事長の私が指示をしたのではなく、各園の保育者が話し合っ

て行動できたことに、「いいまでできるのか」と。

増田…ご紹介した事例も、保育者たちが主体的に検討し、必要だと判断した取り組みですね。柿沼…以前から講義型ではなく対話型で保育を語る研修を重ねてきたことが、活きたのだと思います。保育を語り合う経験があったことで、他者の意見をよく聞きながら、方向性を見出すことができました。

増田…子どもの背景にある家庭それぞれに違いがある、これも改めて認識したのですよね？

柿沼…はい。一所懸命に保育をしてきましたが、背景の家庭には目が届いていなかったことも突き付けられました。大きな反省点でした。保護者のアンケートによれば、「情報がありがたかった」「細やかな対応がうれしかった」などといった声はありま

したが、自宅

で子どもを見ながら仕事もこなすのはなかなか大変なことです。保護者の気持ちに十分に寄り添えなかったことは課題です。しかし、緊急事態宣言が

明けて日常に戻った時には、そうした気づきを保育につなぐことができています。

増田…家庭のことを理解し対応するには工夫や配慮が必要ですね。柿沼…それまで家庭とのつながりは一方通行だったような気がします。家庭でこれほど子どもが過ごす期間はありませんでしたし、これほど子どもが園に来



増田まゆみ先生

徳島ケアアンドエデュケーション研究所長、広島大学大学院、第1、2、3次「保育所保育指針」検討委員、「幼保連携型認定こども園保育要領（仮称）」の策定に関する委員の検討会委員等を歴任。

なかった期間もありませんでした。そんな時に初めて、家庭と園が子どもを通して、密接につながっていることがはっきりと見えてきました。

保育者と保護者が一緒に子どもを育てていく関係性や、食事、体力、人間関係、これらがいかに重要かを双方が理解できたと思います。これからの保育は、家

庭や地域と密接にかかわりながら進めていかなければいけない。

保育者それぞれが考えた

増田…事例を読み私が興味深かったのは、それぞれの園の独自性が見られることです。

柿沼…子どもむらには、子ども園や小規模園もあるので、園合同の研修で一つのテーマを扱っても、同じゴールにはなりません。それを経験していたことも

そのスタート地点によりやく立ってたと感じています。

あつたと思います。保育者一人ひとりが考えていくことを成長と捉え、同僚性を活かしながら答えを求めていったことと、各園の成り立ちが違うことが相まって、様々な対応ができました。

増田…昨年までは、私が子どもむらに何って直接、保育者と語り合う研修をしてきました。現場に身を置くことはとても大事です。しかし、コロナ禍で、We

びでの研修になりましたね。研修や職員間の共通理解のあり方にも新たな可能性を感じます。柿沼…保育者は時間をつくるのが難しいので、W

者として

ebでの研修が可能になって、参加者の数も増やせます。遠方の講師の方にも依頼しやすくなりますし、保育の質の向上にも寄与すると思います。

一人ひとりの保育者が自身の良さを認識し、それを可視化・表現したうえで、さらにより良くするための課題を見出すことです。子どもむらの皆さんは、自分の思いを笑顔で積極的に語っていましたね。

園は人をつなぐハブ。

増田…そうした新たな取り組みのもとでは、保育経験が少なくてもITに詳しい人とか、それぞれの保育者のもつ能力を違った形で出し合えます。私が研修で大事にしているのは、まず、

柿沼…職員同士、保護者や子どもと、いろいろなつながりが見えてきた期間だったので、園は、人と人をつなぐハブ機能をもった場所なのだと改めて思いました。SNSやDVDなど様々なアプローチで発達に合わせたものを提供したことが、家庭での「保育」につながって、子どもの成長にもつながっていたと

したら、とてもうれしいことです。増田…そのハブとしての機能に気付くことも重要ですね。子どもむらは、保育の場として園舎も自然も、恵まれた環境です。緊急事態宣言の時には、保育者が図鑑を手作りしましたね。その話を研修でとてうれしそうに話し、「知らなかったお花が咲いていました」って。恵まれた



柿沼平太郎先生

学校法人柿沼学園 どもむら理事長・学園長、埼玉朝霞市で、認定こども園や保育所、子育て支援センター、学童クラブなどの多くの施設運営を行う。

環境に改めて気付いたこともプ
ラス面ですね。

柿沼：今回、事例の紹介はあり
ませんが、身近な自然を感じて
もらいたい思いが保育者の中か
ら湧いてきて、それを家庭に届
けました。子どもは公園に行く
ことも難しく、少し散歩をする
くらい。園も公園も、日常的に
遊んでいた環境が使えなくなっ
たので、保育者が、手作りの虫
かごと図鑑を片手に、園の周囲
のいつも遊んでいる場所を動画
で撮影したのです。

普段は気付かなかった名もな
いような花、知ってはいたいけ
ど素通りした小さな花にも目を
向けられた。その動画を見て、家
庭で、近くの自然に行ってみた
というやり取りがありました。
保護者も、新型コロナウイルス
がなければ、家の近くの自然に
気づかなかったのかもしれない
し、保育者も成長の階段を

つ上がったのかなと思います。

増田：様々な直接体験とともに、
映像での体験も取り込みながら
保育していく。それを考える良
い機会になったのでは？

柿沼：身近な自然だけでなく、
家庭との関係や地域の子育て支
援も、やったほうが良いことを
忙しさからしていなくて、やれ
るようになった、気付くようにな
ったのは大きいです。

保育者のタイトな勤務の中で、
研修機会の確保も後回しになっ
ていましたが、それもできた。
作成したDVDも、歌や絵本の
読み聞かせではなく、その時期
に伝えたい保育を家庭に届けた
ことで、4月入園で保育者に会
ってもいない子どもたちと関係
性が築けたかのようでした。

本来は、コロナ禍がなくても
できたことです。やっていれば
入園後の生活がよりスムーズに
送れたかもしれません。入園前

や長期休みの子どもたちへのア
プローチをどれだけしていなか
ったか。逆に言えば、アプロ
ーチすれば、どれだけ育ちに大き
く影響するかがわかりました。

こんな時だからこそ楽しく

増田：DVDの中の保育者の表
情が実に楽しそうで、あの姿か
ら子どもは「温かな心」を感じ
取ります。保護者等大人も感じ
取っています。感じ取ったもの
は、体に沁み込んでいくと思
います。

柿沼：保育者たちが楽しそうで
したよね。なにより良かった
のは、保護者も、「大変な状況の
中で笑顔のDVDを見られたこ
とがうれしかった」と言ってく
れて、保育者が楽しんでくれた
ことです。次のDVDはこうし
ようと、だれに言われるでもな
く、行動してくれたのがいちば

今回気付いたことや新しくで
きたことと、これまで大事にし
てきたことを組み合わせると、
より子どもたちが育ってく
れると期待しています。

んうれしいことでした。こんな
状況だけれど何ができるか、自
分たちで考える保育者に育っ
ていると感じ、ありがたく、うれ
しかった。

何が求められているのかを大
事にしていれば、どんな状況で
も対応できる保育者になれるの
だと思えます。

増田：新型コロナウイルスの影
響はまだまだ続くでしょう。子
どもにとってつらい時間になら
ないように、育ちにとってマイ
ナスにならないように、考え、実
践していくこと、今後の課題で
すね。ありがとうございました。

まとめ

保育の本質を思考し、今後に活かす コロナ禍での保育者の主体的な取り組み

増田まゆみ

今を生きるだれもが経験したこと
のない、新型コロナウイルスの人間社会
への大きな影響、終息への見通しをも
てない不安のなかで、家庭、そして園
での生活が営まれています。

新たな気づきから生まれた、 保育者の主体的な取り組み

人は、困難な状況において、例えば、
当たり前に行ってきたことができなくな
った時、それまで気付かなかったこ
とに気付く、また、見えていなかった
ことが見えるようになるものです。
緊急事態宣言のもと、施設の種類に
より、行政からの指示や対応は異なっ
たものの、多くの子どもが家庭で過
すことになりました。

保育者は、直接保育の場がかかわる
ことのできない子どもが、ワクワクし
て集まって遊ぶ姿を、また、園の生活
に戻ってきた時の多様な場面どう取
り組むかをイメージしました。

さらに、保護者が家庭で子どもと遊
ぶ姿や心情をイメージし、何をすべ
きかと思われ、具体的な取り組みに向
けて、新たなエネルギーが湧き出てく
ることが、事例の保育者、保護者、そ

して子どもたちの安から読み取れます。

保育への個々の思いを表現し、 他者との対話へ

さて、保育現場は、日々、実に慌た
だしく過ぎていき、じつくりと語り合
う時間を確保することは至難です。
緊急事態宣言下、DVD作成にもは
じめて挑戦しながら、今までになくゆ
つたりとした時間の流れの中で過ごし
ました。くり返し保育実践を可視化し、
思考する体験から得られた自分の思い
を他者との対話によって、具体的な取
り組みにつなげていきました。そこで、
保育を担う仲間一人ひとりの価値観、
保育力、そして個性ある存在であるこ
とに改めて気付きました。

仲間一人ひとりを相互に活かす合い、
保育の意味を問い、計画や環境構成、
保育方法等を見直すことが、保育の質
の向上につながることを認識したので

理事長や園長に指示されて取り組む
のではなく、保育者がやってみよう、
やろうという、まさに保育者の主体的
で、多様な取り組みが生み出されました。
保護者の実態・心情を尊重して

はじめて園で作成し、家庭へ届けら
れたDVD。保育者の思いが、映像で
具体的にわかりやすく説明されていま
す。子どもも、また保護者もくり返し
見て遊べ、生活習慣の形成へつなが
っています。

加えて、映像での保育者との出会い
から園の環境に親しむを感じること、
「はじめての園生活」「戻ってきた園生
活」にスムーズに入ることを可能にし
ました。

保護者への情報提供にあたって、ア
ンケートを実施しました。家庭の実態
や保護者の思いを具体的に把握した結
果をその後の保育や保護者へのあり方
に活かしていることに注目しましょう。
保護者と協働する保育は、エビデンス
に基づく取り組みによって可能になり
ます。大切にしたい基本的姿勢です。

学び続ける保育者・組織

「保育所保育指針」第5章には、「職場
内での研修の充実」が述べられています。
集合型の研修が当たり前の時代
が終わり、Web会議・研修の可能性
と効果が確認されつつあります。
保育者に限らずその組織もまた、学



び、育ち続けるものです。それが、コ
ロナ禍以降の新たな生活様式での保育
の質、保護者や地域社会と協働する保
育・子育て支援等、園の特性を重視し
た保育の営みを可能にします。
「こどもむら」では、コロナ禍前の集
合型研修から、Webでの多様な研修
（専門性、業務内容等を活かしたグル
ープ構成や人数、方法等）について、一研
修委員」を中心に工夫しながら継続中
です。コロナ禍での、また、その後の
保育の3つのポイント①すべてを命・
園の尊重 ②自然を大切に、自然を活
かす ③協働する保育を軸に、学びを
重ねています。